

昭和49年10月7日 初版発行

© Printed in Japan.

トンガへ逃げる

《検印廃止》

著 者 井 上 一 彦
井 上 富 紗 子
印 刷 株式会社堀内印刷所
製 本 株式会社徳住製本所

振替口座東京2639番
電話東京263局0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

発 行 株式 二 見 書 房
会 社

* 定価はカバーに表示してあります

0095-741042-7339



トンガへ逃げる

井 上 一 彦

井 上 富 紗 子



序文・私の見たトンガの井上一家

トンガ王国撮影旅行で井上家に
十日間居候してきたカメラマン

佐々木 元彦

ひろみちゃんもまさみちゃんも、日曜日になるときまって教会へ行った。別にお祈りや賛美歌をうたうわけでもないようだったが、ただ、トンガの人々の生活のある場所に、ためらいなくとけこんでゆくのが好きなのだ。片手にフロシキをつまみ下げて姉妹仲よくチョコチョコ歩いてゆく格好がとてもご愛嬌で、現地の人気者だった。

「お洋服が汚れるから床にしくの……」

いったいフロシキなんかを何に使うのかとけげんそうに聞く私に、たどたどしく答えてくれたものだ。そして、通路のまん中にチョココンと坐りこんで牧師さんの説教に聞きいるポーズは、なんともまた、ご愛嬌なのだ。

そんな日は、パパもママも留守番役で、ハム局をオープンしたり、レコード鑑賞（日本の曲）などで休日を楽しんでいた。

どうやら、井上一家にとってトンガとは、避暑地なのでは？……そんなふうに思えるほど、

「トンガの日本人」の生活はビューティフルに見えるのだ。

冬といってもやや暑いババウ島のこと、ある日、奥さんはカラフルなムームーを着て、二人の子供たちと港に散歩に出かける。絵にかいたように美しい港に赤い帆のヨット。その間を小魚の群が泳ぎぬけてゆく。子供たちは夢中で魚を追いかける……。素朴だが、これこそ優雅な生き方なのだ。「自然と人間の楽園」をテーマにトンガ撮影旅行を思いついた私にとって、日本人がその仲間入りに成功している姿を確認できたことは幸せだった。

一彦氏は毎晩ウィスキーをやる。居候の私もごしょうばんにあずかった。奥さんの手料理を着に酒盛りは深夜まで続いた。興に乗ってきたころ、私はふと聞いてみたくなった。

「トンガに移住することで、奥さんは反対しませんでしたか」

彼は得たりとばかり口もとをほころばせて……、

「ササキさん、そりゃあ愚問ですよ」

どうやら、永遠の相思相愛を認めたらしい。ごもつともです、夫婦は一心同体でした。

一九七四年、井上一家は人生のオアシスを満喫しているようでもあり、次の新天地に旅するあくなき冒険者たちのようにも思えた。

井上ご夫妻はトンガ王国への移住のようとうと現地での生活をまとめて一冊の本を出版される。彼らの生活をかいま見た一人として、一端を素描してみた。

目次

南の島の求人広告 10

ババウの朝／新聞のコラム／応募／妻の海外熱／手応え
があった／内定通知

安定か冒険か 22

疑心暗鬼／会社を辞めよう／両親に打ち明ける／会社を
辞めた

出発まで 31

なにもわからない／いさかい／準備完了／公害日本をあ
とにして／マスコミ攻勢／いま、日本は……

日本脱出 47

螢の光／深夜のパーティー／億万長者の息子にされた私

／トンガ到着／スクアロファアの社宅で／O・Cサンフト
／七月は真冬である／映画鑑賞

着任地での第一歩 60

ババウ島へ／最初の失望／ハバートの家／社長ハーバート／私の職場

居候生活 66

気がね／富紗子がおこった／南十字星／はかり難い女心
／家が出来た

オロバツハ号 77

島民の足／積荷の引き取り／ハーバート方式

埃だらけの商品 86

スーパーマーケット／トンガ式発想／需要と供給の関係
／競争意識を捨てよう

私の家族 96

子に教えられる／子供の順応性／富紗子も子供／ひろみの親友／しらみ／トンガの色

手さぐりの生活 ¹⁰⁷

ないないづくし／富紗子の日記／日本食的偏向

マネジャー修業 ¹²⁶

コスト計算／販売価格暗記法／数の単位に悩む／ロープは目方で／リッカーパーミット／マネジャーらしい行動

私の民俗学 ¹³⁶

地図がない／安息日

王様の来島 ¹⁴³

引越し騒動／アグリカルチャルショー

不便なわが家 ¹⁵⁵

ベッドがこない／ラビニア・1／ありの這う冷蔵庫／収納場所がない／子供のお友だち／新しい冷凍冷蔵庫

なじみ始めたババウの生活 ¹⁶⁷

新聞の切り抜き／トンガ↓日本／身分制度／おでき退治
／蠅／綿のなる木／あてにならない／住民の食生活／ケ
レケレ／シーヤパーニの映画／ラビニア・2

地主になる ¹⁸⁴

やめたければやめろ／人の使い方／鍵のかかる子供部屋
／一万二千坪の地主になった／農園の収穫

夏 ¹⁹⁹

たそがれ／三^ドか^ニ月と一^バか^ル月／スコール／盗難

暑い秋 ²⁰⁸

ラビニア・3／古着屋開業／失敗した自給自足／みんな
に支えられて／火のありがたさ／トンガ式料理

クリスマスと正月 ²²¹

アルキ・ヘーの罪科／クリスマス商戦／クリスマスツリ

1／お正月

危機

234

食料不足／石油不足／日本からの救援物資／魚ぜめ／みやこに頼る／小康状態

ロイ、ロイ、ロイ 247

家具の注文／ラビニア・4／ルーシー／マシマ

日本と交流

261

日本の幼稚園／水いらず／無線で交信

トンガの夢

267

見習い期間が終った／『日本人重役募集』のこと／結婚記念日／赤あり騒動／トンガと日本／トンガよいとこ

トンガへ逃げる

南の島の求人広告

ババウの朝

鶏がときを告げている。頭のなかで、はるか遠くにそれをきく。あっちで、こっちで、ときを告げ始めた。羽を搏ち首を伸ばす姿がみえるように、近いところでも、ときを告げるとりがある。

教会の鐘が鳴り始めた。これは三十分おきに鳴り、朝を教える。起きろ、起きろ、朝の涼しい風に、光あるうちに働け、とでもいつているつもりだろう。

小犬が鳴く。食事の催促だ。犬をかまう子供の声。

「ババ、時間ですよ」

とうとう、最後だ。妻の宣告だ。起きなければならない。私はもうさつきから目をさましているはずだが、目があかなかった。

「ババ、起きてください、遅れますよ」

もう一度、起こされて、私はやっと目をあける。

トンガの夏は夜が短い。ほとんどの家はランプだから、日の出、日の入りに合わせて生活する。早寝、早起きの見本みたいな国だ。このあたりでは、私がいちばんの寝坊助にちがいない。八時オーブンのオフィスへ、八時五分前に自転車で出かける。その三十分前に、寝室を出る。

小犬の吠え声が不意に大きくなる。居間では、子供たちがおもちゃをひろげている。女中はもう掃除を終えたのだろう、日を浴びて洗濯をしている。

妻の冨紗子は、食事の支度をすっかりすませ、私を待ちきれずに、コーヒーをすすっている。「おはよう、パパ。どうしてもっと早く起きないの、あと三十分早く起きて、散歩をすればいいのに。それはさわやかで気持ちいいわよ。まるで軽井沢の朝みたい」

私はまださめきらない頭に、緑があわく光り、しめった赤土に、木もれ日の落ちていた軽井沢の朝を思い浮かべる。ひんやりした冷気がなつかしい。

パパウの私の朝は、もう暑い。家のまわりは見渡すかぎり緑の芝生だ。遠く近く、椰子の葉と木でつくったトンガンハウスが点在する。前の家もトンガンハウスだ。入口のところに、おばさんが、太ったからだをだるそうに休ませている。片脚を長くして、低い石に腰かけ、すこし笑っている。見なれた風景だ。彼女は食事も掃除も、朝の仕事はすべて終って、すでに退屈しはじめているにちがいない。

大きな実をたわわにぶら下げた木が、私の家の敷地内にも何本かある。一本の木の根もとの木かげに頭をつっこんで、豚が餌をあさっている。向こうの家の木かげには馬が二頭つながれて、足元の芝に鼻をつけて、草を食べている。

ひよこを従えためんどりが、胸をはって歩き、ときどき片脚をあげて、あたりを見回す。

私はそそくさと食事をすませる。あたりののんびりした風景にふさわしくない姿だろうとおもう。そして、また寝坊してしまった、と呟いてしまう。私は、四季のさだかでないババウでもう半年をすごした。南太平洋の長すぎる暑さに、夏ばて気味で、だるくてしょうがない。

トンガの夜明けを見たことはある。それは考えられぬくらい美しく、語ることもできないすばらしさなのを知っている。だが、ここに住みはじめてから、私はまだ、ババウの夜明けを見たことがないのだ。

夏ばてをふっとばすには……。半年前、トンガに着いた私を、一通の手紙が待っていた。日本脱出を決行した私に、決意の前後、トンガの生活を書いて本にしてみないか、とその手紙にあった。私は、もの書きではない。一介の商社マンだったし、これからもそうだ。書けるかなあ。それでも、このすすめは、私と妻の冨紗子をいたく喜ばせてくれたものだ。

原稿用紙のますの一つ一つに文字を書き入れることを、私も冨紗子もしたことがない。でもいいや、下書きはノートにでも、書きたいように書いて、冨紗子に浄書させよう。これはいい

考えかもしれない。

私はオフィスまでの五分間、河岸ぞいに自転車走らせつつ、書き出しのことばかり考えた。日本を出るころ……あのころも、毎朝ぎりぎりまで寢床にいて、そそくさと朝食をかきこんで、あわただしく家を出たものだ……。

新聞のコラム

昭和四十八年二月十五日。その日は私たちの結婚記念日でもあったから、よくおぼえている。

その朝、いつものように、あわただしく家を出た。通勤一時間の車中では、新聞を読むことにしていたから、その日も、奥沢から目蒲線に乗ると、さっそく新聞を開いた。いちおう政治欄に目をとおし、わずかな持株の株価を見、スポーツ欄を読んだ。そして、社会欄を開き、なにげなく目をやったコラムに『南太平洋に浮かぶトンガ王国で、日本人の重役募集』とあるのを見つけた。目をこらして読むと、『南太平洋の最後の楽園といわれるトンガ王国の総合商社 O・G サフト兄弟商会で、日本人の重役を募集中』とあった。ポジションはと見ると、ブラチマネジャール、年収二、二〇〇ドル（トンガドル）約四〇〇円。ジュネラルマネジャール、年収三、三〇〇ドルで、各二名を募集しているという。

夫婦で週に一〇ドルもあれば、らくに暮せる国柄なので、御希望のむきはジェットロ（日本貿易振興会）公報渉外課へぜひどうぞ、という簡単なものだった。

私は、その記事を何回も読み返した。

南太平洋の島は、小さいころから一度は行ってみたいと夢みていたあの地の地だ。それと、求人先が商社というのも気に入った。ジェットロは、これから直行するはずの印刷会社の途中にある。とにかく、くわしいことを訊いてみよう。

ジェットロの公報渉外課は八階にあった。

「すみません、新聞で見た、トンガで募集の件できましたが」と言うと、机の前に立ってあちこちの書類をかきまわしていた男が顔をあげた。

「新聞はなにを見たんですか」

「日経です」

男は待っていましたといわんばかりに、机の前にあった二、三枚の書類をくれた。

「まだくわしいことは、こっちでもわからないんです。直接先方へ問い合わせてください。住所は、この赤線を引いてあるところです」と、サンフト社のレターヘッドのところを指さした。「きょうは、あの記事が出たものだから、朝から、あなたのような人はくるわ、電話で問い合わせはくるわで、仕事になりませんよ」と笑った。

そういえば、二つある電話がかわるがわる鳴って、女子事務員が応待に大いそがしだった。そうだろう、あんな夢みたくない記事を読めば、行ってみたいとおもう人がずいぶんいても、

すこしも不思議はない。

応募

すぐにもサンフト社へ手紙を出したいとおもったけれど、帰宅後では子供たちが起きていておちつかない。三日後が日曜だから、その日にしようときめた。

二日後にまた新聞に『ジェットロに日本人重役応募者殺到』という記事が出た。私は、こんなに希望者が多いんじゃ、とてもむりだろうな。でもいいや、やるだけやってみよう、とおもった。

三日後の二月十八日。日曜日は、いつもなら昼ごろまでごろごろしているし、起きれば子供の相手をして遊んでやる私が、朝から机に向かって、辞書を片手に書きものをしているので、妻は疑問をもった。私は、だめになるときまっているようなもので、妻にはまだ内緒にしておきたかったのだ。

「パパ、なにをしているの」と、のぞきにきた。

ちよっとてれくさかったが、新聞の切り抜きと書類を見せた。妻はしばらく書類を見ていたが、「おもしろそうね。でも、きつとだめでしょ」とすげなく言った。

どうせだめさ、と私もおもっていたが、こう簡単に言われると、おもしろくなかった。

「どうしてだ」

「だって、重役でしょ、パパでは年が若すぎるわ。先方では、もっと経験のある人が欲しいん